

金沢が育んだ建築家・谷口吉郎の世界

谷口吉郎・吉生よしお記念金沢建築館を訪ねて

いしかわ観光特使 西島 幸夫

仲秋の昼下がり、近代日本を代表する建築家谷口吉郎（1904～1979）と子息の吉生氏を顕彰する金沢建築館を訪ねた。吉郎は片町にあった九谷焼窯元の生まれで、第四高等学校卒業まで金沢で過ごした。ふるさとを想う気持ちが強くなり、終生、金沢の街づくりに関わり「金沢の持つすぐれた環境が、都市近代化の中で調和し保たれていくべき」（1967年）と提言した。翌年、全国に先駆けて「金沢市伝統環境保存条例」が制定され「伝統環境の保存と都市開発が調和したまちづくり」が進められた。市は永年の功績により金沢市名誉市民第1号（1978年）を贈った。

作品は、東宮御所や東京国立



「金沢建築館」
（撮影 北嶋俊治）

「文章に詩があるように 建築にも詩があるとすれば 私の求めているものは 水晶の結晶のごとき建築であろうか」 「建築は口を持たない沈黙である しかし建築は沈黙にもかかわらず その「形」は表情を持ち 作家の心を

「清らかな意匠」への歩み

博物館東洋館のような後世に残る不朽の名作が多い。1973年文化勲章受章。吉生氏が吉郎の住まい跡地を市に寄贈し、その跡地に金沢建築館が開館（2019年7月）した。当館は、およそ70の寺院が立ち並ぶ寺町にあり、犀川を眼下に望む台地の一角に吉生氏が環境に配慮し設計した。全国でも珍しい建築・都市専門ミュージアムだ。

開館記念特別展「清らかな意匠」（2020年2月16日迄）が開かれている。谷口吉郎の求めた建築への想いが記されていた。

伝える

谷口の業績を3期に分け、各時代の代表作の建築模型や設計図が展示されていた。第1期（1931～1938）「モダニズムの実践をめざして」 1920年代後半、日本にもモダニズムが導入され、機能や住み心地を手がかりに間取りや形を追求した時期。第2期（1939～1959）「形が人に訴えかける力を信じて」 1938年から1年半ベルリンに滞在、新古典主義の影響を受けた。古代ギリシャ神殿をモチーフにした様式が人に訴えかける力の強さに感銘を受け、モダニズムからの転換を図る。第3期（1960～1979）

「清らかな意匠」の完成へ

縦長のプロポーションや縦格子の連続など、それまで考案してきたモチーフや要素を精妙に調整し組み合わせながら、迎賓施設から碑まで、オフィスビルから和風建築まで、気品ある端正な姿に仕立て上げた。そして「清らかな意匠」という独自の美しさを表現した。

2階は常設の和風空間である。「迎賓館赤坂離宮和風別館」（港区1974年）の47畳の大広間と茶室を原寸大で細部まで



47畳大広間の再現
迎賓館赤坂離宮和風別館「游心亭」



茶室の再現

忠実によりみがえらせている。当時の建材も使った手仕事は匠の技の結晶だ。ガラス窓の外に美しい水庭が設けられ、その先に犀川や中心街が眺められた。

谷口の特筆すべき仕事に「文学碑」という記念碑芸術の創造がある。第1号は、郷里金沢生まれの作家徳田秋聲文学碑（金沢市卯辰山1947年）である。生涯70基以上の碑を手がけた。また、明治の歴史的建造物の移築・保存のため、博物館明治村（1965年）の創設に尽力し、その初代館長を務めた。

「建築文化」が花開く時代

当館の設計を担当した子息の吉生氏は、疎開で幼少の一時期

を金沢で過ごしている。父子唯一の合作が金沢市立玉川図書館（1978年）だ。ニューヨーク近代美術館新館を設計するなど国内外で活躍し美術館建築の名手として知られる。2011年、吉生氏の設計による鈴木大拙館が開館した。禅の世界へ導く静逸な空間と水鏡の庭が素晴らしい。



大広間（左手）と水庭（撮影 北嶋俊治）

2020年7月、兼六園に近い本多の森へ東京から「国立工芸館」が移転してくる。明治の建築、旧陸軍第九師団司令部庁舎と旧金沢借行社が移築・リニューアルされ、その威容を現した。金沢はレトロな建築や貴重な近代建築物が多く保存されているので、アーキテクチャー・ツーリズム（建築物をめぐる旅）という知的な旅が楽しめる街だ。金沢建築館が建築文化とまちづくりの拠点となり、金沢の魅力がますます高まることが期待される。